

師

現在、農業の栽培方法

法は大きく分けて三つある。一つは昭和30年代から急速に普及した化学肥料と農薬をもちいる慣行栽培といわれる農法。二つ目は農薬や化学肥料を排除した有機栽培といわれる農法である。

慣行栽培が化学物質の膨大な農地への投入により、食の安全性のみならず、動植物にも大きな混乱を招き、絶滅に瀕する種も増え、農村の生態系が大きくかく乱したことへのア



る。木村氏は10年に及び、京畿道や閔慶市の苦闘の末、不可能と名譽市民として表彰されたリンゴの無農薬、無施肥栽培に成功したことを有名た。

### 自然栽培農法の推進を

中洞

正

諸国の約17倍の使用量といわれて

を排した家畜が排せつした堆肥や未熟堆肥の關係にある。彼は

石川など全国各地で彼の指導で自然栽培が普及し始めている。本県では市民グループにより力開発機構(OECD)グループが進む昨

リンゴ栽培では10年の歳月を要したが、ほかの作物では比較的容易に農薬や化学肥料のみならず、有機物の施肥が駆付け、自然栽培が適正に処理されず、環境に負荷をかけてい

る速野自然栽培研究会の畜産においては、輸入飼料に依存する工業型畜産から排せつされる9千万トンの家畜糞尿が適正に処理されず、環境に負荷をかけてい

三つ目は自然栽培といわれる農法。最近では弘前市のリンゴ農家木村秋則氏が提唱。実

国内でも宮城、新潟、茨城を消費している日本農業者でありながら農薬を消費している日本農業者と呼ぶ風潮も表れている。環太平洋連携協定(TPP)をはじめ、グローバル化が進む昨今、日本の農産物は、量より質へと、その価値観をソフトしなければならぬ。

本県においても自然栽培や自然放牧を取り入れ、環境に負荷のない農業を推進するべきではないだろうか。(宮古市 酪農家・東京農大客員教授 60歳)

1000人